

病害虫発生予察情報（5月予報）

令和5年4月26日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (5月の県平均平年値)	予報の根拠
稲	縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)	縞葉枯病発生量：やや少 ヒメトビウンカ発生量：並	昨年8月発生量 縞葉枯病：並 (±) ヒメトビウンカ：多 (+) 気象予報：気温：並か低い(±~-) 降水量：並か多い(±~-)
小麦	赤かび病	発生量：やや多	4月下旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：並か低い (±) 降水量：並か多い (+)
ばれいしょ	疫病	発生量：並 (発病株率8.0%)	4月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並か低い (±) 降水量：並か多い (+)
	ジャガイモガ	発生量：少 (寄生株率0.4%)	4月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並か低い(±~-) 降水量：並か多い(±~-)
	アブラムシ類	発生量：少 (寄生株率22.1%)	4月中旬発生量：少 (-) 気象予報：気温：並か低い(±~-) 降水量：並か多い(±~-)
温州みかん	かいよう病	発生量：並 (発病度0.04)	4月中旬発生量：少 (-) 気象予報：気温：並か低い (±) 降水量：並か多い (+)
中晩柑類	かいよう病	発生量：並 (発病度0.04)	4月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並か低い (±) 降水量：並か多い (+)
うめ・もも・ びわ・なし	果樹カメムシ類	発生量：並 (ただし西部地域はやや多)	越冬虫数：並 (±) ただし、西部地域はやや多 (+)
キウイ フルーツ	かいよう病	発生量：並	4月中旬発生量：やや少 (-) 気象予報：気温：並か低い (±) 降水量：並か多い (+)

作物名	病害虫名	予報 (5月の県平均平年値)	予報の根拠
茶	チャハマキ	発生量：並 (寄生虫数 0.5 頭/1.25 m ²) 発生時期：やや早い	4月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：並か低い (±) 降水量：並か多い (±)
	チャノコカクモン ハマキ	発生量：やや少 (寄生虫数 0.1 頭/1.25 m ²) 発生時期：やや早い	4月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：並か低い (±) 降水量：並か多い (±)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：多 (叩き落とし虫数 4.9 頭/4 か所)	4月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：並か低い (±) 降水量：並か多い (±)
	チャノミドリ ヒメヨコバイ	発生量：多 (叩き落とし虫数 1.6 頭/4 か所)	4月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：並か低い (±) 降水量：並か多い (±)
	カンザワハダニ	発生量：多 (摘採面寄生葉率 2.5%)	4月中旬発生量：多 (＋) 天敵(カブリダニ類)発生量：少 (＋) 気象予報：気温：並か低い (±) 降水量：並か多い (±)
	クワシロ カイガラムシ	発生量：少 発生時期：やや早い (5月未調査)	4月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：並か低い (±) 降水量：並か多い (±)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(＋)、少発要因の場合は(－)を示し、＋－を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報
はこちら
で検索!



静岡県農薬安全使用指針
・農作物病害虫防除基準

<https://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【稲】

●縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

予報の根拠

- ・昨年8月の巡回調査では、縞葉枯病の平均発病株率は0.5%（平年0.6%）と平年並であった。
- ・昨年8月の媒介虫ヒメトビウンカの最多寄生虫数の平均は1.8頭/株（平年1.0頭/株）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いため、媒介虫ヒメトビウンカの発生を助長しない。このため、本病の発生も特には助長されない。

防除対策

- ・発生地域の発生時期に当たる作付では、縞葉枯病抵抗性品種（あいちのかおり SBL）を利用する。
- ・発生地域ではヒメトビウンカ対策として箱処理剤を施用する。

<その他の病害虫>

●苗木枯病、いもち病（苗いもち）、ばか苗病、もみ枯細菌病、イネシンガレセンチュウ

種子消毒（作業を省かず、以下の点に留意して行う。）

- ・自家採種の種もみは塩水選を必ず行う。
- ・「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準（ホームページ<https://www.s-boujo.jp/>）」に掲載の種子消毒法の手順を守り実施する。
- ・厚播きは発病を助長するため、適正な種子量を守る。

育苗管理

- ・出芽期は30℃以上、緑化期以降は25℃以上の高温とならないよう、できるだけ温度管理に注意する。
- ・本県ではMBI-D剤耐性いもち病菌が発生している。また、近年、他県ではQoI剤耐性いもち病菌が発生し問題となっており、本県でも発生が懸念される。耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する。詳細は日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会ホームページの「殺菌剤使用ガイドライン」（<http://www.taiseikin.jp/guidelines/>）を参照。

●イネミズゾウムシ

- ・昨年7月の巡回調査では、イネミズゾウムシによる被害株率は1.5%（平年2.9%）と平年より少なかった。常発地では箱処理剤を施用する。

●イネドロオウムシ

- ・主に東部高冷地で発生がみられる。昨年6～7月の東部高冷地における被害株率は、6月：0.8%（平年2.7%）、7月：4.4%（平年7.6%）と平年より少なかったが、常発地では箱処理剤を施用する。

●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

- ・ 県内全域で分布が拡大している。
- ・ 例年5月以降に活動を開始し、移植後の苗を食害するため、普通期栽培水田では、移植後の薬剤処理を実施する。また、移植後2～3週間は食害を抑制するため、浅水管理（4 cm 以下）に努める。周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬している可能性があるため、水路から泥を上げて貝を破砕する。
- ・ スクミリンゴガイには寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめること。

【小麦】

<生育の概況>

生育は平年より7日程度早い。

●赤かび病

予報の根拠

- ・ 4月上旬の巡回調査では発生は確認されなかった（平年発病穂率0.04%）が、4月下旬の調査では発病穂率0.8%（平年0.8%）と平年並の発生であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いため、発生をやや助長する（赤かび病は出穂期以降の日平均気温が18℃～20℃、多湿条件下で発生が助長される）。

防除対策

- ・ 開花期～乳熟期にかけて感染する。防除適期は開花期頃である。コムギの生育状況をよく確認し、適期と考えられる時期に防除を実施する。
- ・ 降雨によって多発することがあるため注意する。
- ・ 日平均気温が18℃～20℃で降雨が続く場合には、追加防除を行う。

<その他の病害虫>

●うどんこ病・赤さび病

- ・ 4月上旬の巡回調査では、うどんこ病の発病株率は52.6%（平年12.6%）と平年より多かった。赤さび病の発病株率は3.6%（平年1.9%）と平年よりやや多かった。
- ・ 発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ 静岡県奨励品種である「きぬあかり」はうどんこ病に弱く、また「イワイノダイチ」、「農林61号」より赤さび病も発生しやすい。止葉の一枚下葉の展開期以降～止葉抽出期に両病害の防除、さらに開花期に赤かび病との同時防除を行う。

●ハモグリバエ類

- ・ 4月上旬の巡回調査では寄生株率9.4%（平年6.8%）と平年より多かった。
- ・ ほ場内の発生に注意し、多発した場合は薬剤により防除する。

【ばれいしょ】

<生育の概況>

全ての作型で前年と同程度、平年より早く生育している。

●疫病

予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では発生は認められなかった（平年発病株率2.3%）。
- ・1か月予報では、気温は平年並か低いが、降水量は平年並か多いため、発生を助長する。

防除対策

- ・本病は10℃を超えると活動が始まり、18～20℃が最適温度となる。開花期以降に気温が15℃以上、かつ降雨により湿度が高い状態が継続すると発病しやすくなる。
- ・発病に好適な気温下で降雨が続くと本病は急速にまん延する。多発生すると防除は困難になるので、開花期前からの予防散布を行い、発生初期のうちに防除すること。

●ジャガイモガ

予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、寄生は確認されなかった（平年発生なし）。
- ・1か月予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・葉での被害は少なく目立たないが、塊茎での被害を回避するため、開花期以降に防除する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、寄生株率は6.2%（平年15.6%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・気温の上昇とともに発生量の増加が予想されるので、密度が低いうちに防除を行う。
- ・アブラムシ類の発生源となる、ほ場内や周辺の雑草を除草する。

【温州みかん】

<生育の概況>

果樹研究センターの報告によると、静岡市清水区における発芽期は、宮川早生で3月27日、青島温州で3月25日となり、平年より早かった。また、同市同区における開花始期は、宮川早生で4月23日（平年より14日早い）、青島温州で4月27日（平年より9日早い）と予想される。

●かいよう病

予報の根拠

- ・4月の巡回調査では、発病度は0.01（平年値0.26）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いため、発生を助長する。

防除対策

- ・昨年または現時点で本病の発生が確認されているほ場では、中晩柑類に準じた防除を行う。ただし、新芽は薬害が出やすいので注意すること。また、銅剤を使用する場合、中晩柑類に比べて果実への薬害が出やすいため注意する。

【中晩柑類】

●かいよう病

予報の根拠

- ・4月の巡回調査では、発生は認められなかった（平年値 0.92）。
- ・1か月予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いため、発生を助長する。

防除対策

- ・防風垣、防風網の整備等を行い、防風対策に努める。
- ・中晩柑類では、5月上旬及び下旬、6月下旬（梅雨期）に薬剤散布を行う。ただし、新芽に薬害が出やすいので注意する。

【うめ、もも、びわ、なし】

●カメムシ類（チャバネアオカメムシ）

予報の根拠

- ・今年1月における越冬量調査において、落葉 1 m²あたりのチャバネアオカメムシ越冬虫数は 1.0 頭/m²（平年 1.2 頭/m²）と平年並であり、春期の発生量は県全体として平年並と考えられる。ただし、西部地域の越冬虫数は 1.7 頭/m²（平年 1.2 頭/m²）と平年よりやや多いことから、春期の発生に注意する。

防除対策

- ・地域やほ場によって発生状況が異なる場合があるため、ほ場における発生をよく観察し、早期発見・防除に努める。

【かき】

<その他の病害虫>

●チャノキイロアザミウマ

- ・アメダスデータを用いたシミュレーションによると、多くのかき産地では、本種第1世代成虫の発生時期は4月29日～5月15日（産地により時期が異なる）と予想され、例年より発生が早いので注意する。
- ・防除は、病害虫防除所ホームページに掲載している「チャノキイロアザミウマ発生時期予測」を参考にし、実施する。

【キウイフルーツ】

●かいよう病

予報の根拠

- ・4月の巡回調査では、発病葉率は1.7%（過去7年間の平均発病葉率2.6%）でやや少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いため、発生を助長する。

防除対策

- ・病原菌の生育適温は10℃～20℃であり、罹病樹から漏出した樹液が風雨により飛散することで気孔や傷口から感染する。
- ・細菌病であり、樹体内に病原が侵入すると根本的な治癒は困難であるため、防除は予防が中心となる。
- ・受粉結実後～果実肥大期までに予防的に防除を実施する。なお、花芽伸長開始後は、使用する薬剤によっては薬害を生ずるので、コサイド3000を使用する。散布にあたっては、薬害軽減のため炭酸カルシウム剤を加用する。
- ・管理作業時に付着した罹病樹の樹液により感染が拡大するため、せん定器具はこまめに消毒する。

【茶】

<生育の概況>

新芽の生育は平年よりやや早く、4月中旬の巡回調査時には一部地域で摘採が始まっていた。

●チャハマキ・チャノコカクモンハマキ

予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、チャハマキ越冬幼虫は0.06頭/1.25㎡（平年0.05頭/1.25㎡）と平年並で、チャノコカクモンハマキ越冬幼虫は認められなかった（平年0.11頭/1.25㎡）。
- ・各地域の予察灯及びフェロモントラップによる越冬成虫の発生状況は、発生時期は両種ともに平年よりやや早く、これまで気温が平年より高く推移していることから、今後の幼虫の発生も平年より早くなると考えられる。
- ・1か月予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いため、両種幼虫の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・防除適期は、地域の予察灯やフェロモントラップの成虫誘殺状況を参考にして防除時期を決定する。また病虫害防除所のホームページでは県内各地の成虫誘殺状況を掲載しているので参考にする。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は1.2頭/4カ所（平年0.5頭/4カ所）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・例年、二番茶生育期から発生が増加するので、萌芽期から開葉期にかけて防除を実施する。二番茶の萌芽時期に本虫の発生に注意し、被害が出る前に防除を行う。

●チャノミドリヒメヨコバイ

予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.9頭/4カ所(平年0.2頭/4カ所)と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年か多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・例年、二番茶生育期から発生が増加するので、新芽の開葉期に防除を実施する。二番茶の萌芽時期に本虫の発生に注意し、被害が出る前に防除を行う。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、摘採面での寄生葉率は3.3%(平年1.9%)、裾部での寄生葉率は3.1%(平年1.9%)と平年より多かった。一方、天敵のカブリダニ類の平均叩き落とし虫数は、0.02頭/4カ所(平年0.11頭/4カ所)と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年か多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・例年、5月は天敵のカブリダニ類の増加によりハダニの密度抑制が期待される。一番茶摘採後の残葉でのハダニの密度に注意し、密度が高まる前に早めに防除を実施する。

●クワシロカイガラムシ

予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.2%(平年7.1%)と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・アメダス気温データを用いた牧之原(菊川市:茶業研究センター)の第1世代幼虫の予想ふ化最盛日は、4月25日現在の計算では5月9日(昨年5月14日、平年5月18日)と昨年より5日早く、平年より早いと予想される。
- ・第1世代の幼虫ふ化時期は、第2世代以降に比べ揃うため防除効果が高い。発生が見られる茶園では幼虫のふ化状況を観察し防除を行う。なお、各地の予想ふ化最盛日と防除適期の目安は、病虫害防除所ホームページで提供している。

<その他の病虫害>

●チャノサビダニ・チャノナガサビダニ

- ・一番茶摘採残葉や摘採が遅くなった一番茶葉に多発することがある。
- ・雨が少なく乾燥条件が続くと、急激に密度が増加する。著しい被害が発生すると、二番茶芽の生育が抑制されることがあるため、発生が見られたら早めに防除する。

●チャノホソガ

- ・新芽生育期と成虫発生期が合致すると発生が多くなる。地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移や新芽への産卵状況に注意し、適期防除を実施する。なお、成虫の誘殺データについては病虫害防除所ホームページで情報提供している。

●炭疽病

- ・3月上中旬の巡回調査では、古葉における平均発病葉数が32.0枚/1.25m²（平年17.2枚）と平年より多かった。よって伝染源密度は平年より高いと推測される。
- ・感染は新芽の上位3～5枚目くらいまでの新葉に限られる。また、感染には10時間以上の濡れが必要で、新芽の生育期に降雨が続くと発生が多くなる。このため、天候に注意し、二番茶芽の開葉期に防除を実施する。

●もち病

- ・昨年10月の巡回調査では、平均発病葉数4.0枚/1.25m²（平年3.5枚）と平年よりやや多かった。よって伝染源密度も高いと推測される。
- ・伝染源となる担子孢子の発芽には高い湿度（99%以上）が必要で、発芽と菌の生育適温は16～20℃である。本年は中間山地の茶園や茶業研究センター内で既に初発が確認されており、多発すると治療剤（浸透移行剤）でも十分な防除効果が得られなくなるので、茶園をよく観察し、発生初期に防除を徹底する。例年発生がみられる茶園では、二番茶の萌芽～開葉期に予防散布を実施する。なお、耐性菌の発生を防ぐため、DMI剤の連用は避け、予防剤（保護剤）と組み合わせて防除する。

●褐色円星病（緑斑症）

- ・4月中旬の巡回調査では、平均発病葉率49.8%（平年42.7%）と平年よりやや多かった。秋冬期の気温が高かったことから、感染、増殖可能な期間が増えたことが要因として考えられる。多発園では新芽の下古葉が落葉しており、落葉すると樹勢が低下することから、減収や品質の低下を招く。
- ・一番茶期には防除手段がなく、薬剤による防除適期は三番茶または秋芽生育期である。そのため、発生状況が最もわかりやすいこの時期に発生茶園を確認しておき、適期になったら防除する。

【きく（施設）】

<その他の病害虫>

●黒斑病・褐斑病

- ・多湿で発生が助長されるため、施設内環境に注意する。また、病原菌の生育適温は黒斑病24～28℃、褐斑病20～28℃である。
- ・本病は潜伏期間が長く、発病後の防除では手遅れとなるので、薬剤の予防散布を行う。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。
- ・親株が罹病しているとそこから新芽に伝染し、定植してから発病することが多いため、発病が見られる株を親株として用いない。

3 季節予報

● 1か月予報 (東海地方 令和5年4月20日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 4月22日から5月21日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月	天候	天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。
	気温	平均気温は、平年並または低い確率ともに40%です。
	降水量	降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。
	日照時間	日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。
1週目	気温	1週目は、低い確率60%です
2週目	気温	2週目は、平年並の確率50%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	40	40	20
1か月	降水量	20	40	40
1か月	日照時間	40	40	20
1週目	気温	60	30	10
2週目	気温	20	50	30
3～4週目	気温	30	40	30

【予報の対象期間】

1か月 : 4月22日(土)～5月21日(日)
 1週目 : 4月22日(土)～4月28日(金)
 2週目 : 4月29日(土)～5月5日(金)
 3～4週目 : 5月6日(土)～5月19日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--